

品田悦一著



自体が文学史の中で、特に明治維新以降どのような社会的役割を担わされてきたのかを探ったものである。

現代人にとって万葉集はなじみの歌集であり、「日く近代化が図られた明治は本人の心のふるさと」をそこに感じたりもする。東京に住み、平安文学を学ぶ評者なども巻十四の東歌に引かれて、文学散歩に足を運んだりする。

本書はその万葉集に関する著作であるが、個々の歌への言及を意図するものではなく、万葉集という存在

西欧列強に伍（二）すべく近代化が図られた明治はまた、近代国民国家の成立というみぞうの変革期であった。そうした中で、文学史のかなたから呼び戻され、国民の古典の最高峰である国民歌集の地位を新たに付与され、国民の一体感を確保するための「文化装置」として發明されたのが、万葉集であった、と著者は説き明かし、それが普及していく過程を跡付ける。

文化装置としての国民歌集

広範で新鮮な文献資料に基づき、ち密に仕立て上げられた論理によって解きほぐしてゆく方法は、著者自ら唯一の方法論とする「論より証拠」を地でいくものだが、その確かさは目を見張るものがある。資料への目配りの広さも博覧強記そのものである。何よりも、

万葉集が国民国家の「文化装置」として發明されたとする刺激的かつ挑戦的なテーマには、目からうろこの思いを禁じ得ない。確かに、古典文学の享受には、未来永劫（えいごう）に至るまで不変ということはある。

（新隴社・三二〇〇円）
元吉進・昭和女子大助教